



作者たちが語る「いしかり博物誌」

連載100回目を記念して、今回はいしかり博物誌の作者たちにインタビュー！
連載にかける思いや裏話、さらには今後の展望についても語ってもらいました。



石狩紅葉山49号遺跡の柵の一部
◆第47回『カナダ先住民のサケ・マス漁』より



(写真右)明治10(1877)年に操業を始めた開拓使石狩缶詰所では主にサケの缶詰を製造。現在の金額で1個4,000円相当しました。
◆第95回『サケ缶の食べ方』より

—今回でついに連載100回目となりました！まずはこれまで書かれた中で、皆さんのお気に入りをお教えください。

石橋 私はカナダの先住民が使っていた道具と石狩紅葉山49号遺跡で見つかった道具がほぼうり二つだったことについて書いた『カナダ先住民のサケ・マス漁』(第47回)です。昔からサケやマスを食べる人が世界中にいて、さらに共通する技術で採っていたのは驚きでした。

工藤 私は『サケ缶の食べ方』(第95回)です。昔、欧米でサケの缶詰がたくさん売れたのですが、どうやって食べているのかと疑問に思っています。調べてみるとサラダなどにして食べていることが分かり、自分としても謎が解けて非常に面白かったですね。

志賀 僕は4つあります！まずは石狩の海の色が2色に見える謎に迫った『石狩の海の色』(第67回)と、石狩浜に漂着したルリガイ

とギンカクラゲについて書いた『銀貨と瑠璃、北海道初上陸』(第93回)。どちらも簡単に調査できることを書いていて、誰でもやる気さえあれば、自然のことが分かるんだよということを知ってほしいと思つて書きました。『石狩はどこで雨出す?』(第20回)と『石狩でいちばん高い山』(第17回)も気に入っています。

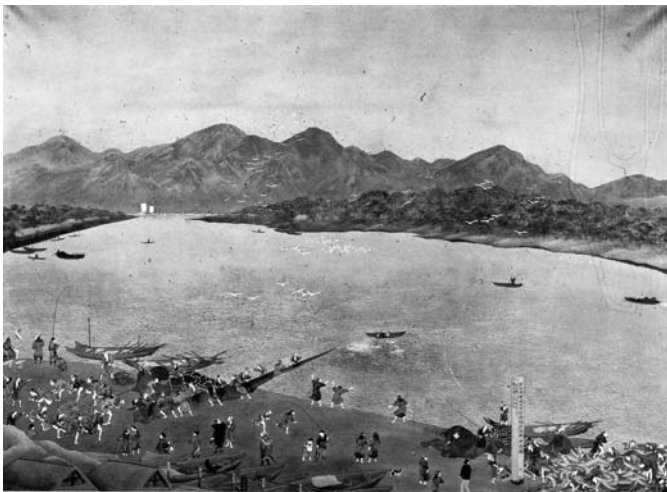
—ここまで続けるのにネタ探しなど苦労も多かったのでは？
石橋 ネタは豊富にあるので問題ありません。ただ、文字数に限りがあるので、分かりやすくまとめるのは苦労しますね(笑)。

志賀 確かに。専門的な話をどこまでかみ砕いて話すかは一番の悩みどころです。

工藤 3人も同じだと思いますが、ネタは素朴な疑問から広がっていくことが多いです。すぐに答えられないものでも積み重なっていくうちに一つにつながったり、あるとき

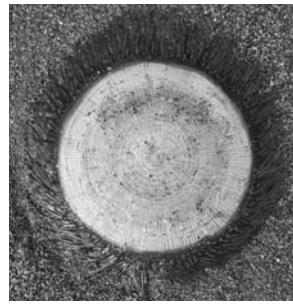


石橋 孝夫 Takao Ishibashi
専門分野は考古学と石狩史。石狩市内の石狩紅葉山49号遺跡の発掘を手がけ、以降は縄文時代から江戸時代に至るサケ漁の方法と文化についても研究している。



『石狩鮭漁の図』(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター蔵)

▶ 第98回「石狩から見える山(絵画編)」より



平成19年9月下旬～10月下旬にかけて石狩浜に漂着した「ギンカクラゲ」。白い円盤の周囲と裏には青い触手がたくさん!



美しい瑠璃色の貝殻「ルリガイ」。平成19年10月に北海道初上陸!

▶ 写真とともに第93回「銀貨と瑠璃、北海道初上陸」より

にピンとひらめいたり。中にはいざ書き始めると思っていたほど面白く仕上がらなくてお蔵入りになった話もあつたりしますけど(苦笑)。

石橋 書きかけの原稿は私もたくさんあります(笑)。

工藤 理想は、以前に志賀さんの『石狩から見える山』(第16回)に触発されて書いた『石狩から見える山(絵画編)』(第98回)のように、同じテーマをそれぞれの専門分野から書けるといいですよ。歴史や植生、地質などがうまくかみ合つて続くと面白いと思うのですが、ローテーションやタイミング的なこともあつて、なかなか難しいのが現状です。

—ところで考古学や地質学に興味を持ったきっかけは何だったんですか？

工藤 父親の影響が強いですね。考古学や郷土史に興味のある人で、小さいころから遺跡や史跡に連れて行ってもらっていました。

石橋 私も小さいころから興味があつたんですね。幼稚園のころにアルタミラの洞窟壁画などが載っている絵本を買ってもらつて、それを見て面白いなと思つたんです。考古学は誰も知らなかったものを発見し、文章にして伝える楽しさがあります。歴史のページをめくる醍醐味は考古学の一番の面白さだと思います。

工藤 考古学は限られた手がかりの中で、どういふことが起こつたのかを考える学問ですから、推理小説のような楽しさもありますよね。

志賀 僕が地質学に取り組みようになったのは大学からです。地層を調べていくと、地球がだんだんと寒くなつたり、暑くなつたりしたのはなく、もつと急激にダイナミックに変化してきたことが分かる。気候の変化には、大陸の移動や地球軌道の変化などの原因がある。そんなスケールの大きさに感動し、以降はどつぱりと地質学にハマっています。

—「いしかり博物誌」を通して伝えたいことは？

志賀 広報紙での連載は、博物館の教育普及活動として最も根底にあたるものだと考えていて、ここから郷土の歴史や文化などに興味を持つてもらえたらと願っています。

石橋 石狩は何万年もの歴史を持つていて、私たちはその時間の一番新しいところにいるわけです。自分の足元がどんな風になつているのかというのを、いろいろな角度から伝えていけるといいですね。

工藤 歴史や考古学、植生、地質などといった角度からみると、石狩にはまだまだ面白い魅力がたくさんありますから。そうした面をもつと伝えていきたいです。



志賀 健司 Kenji Shiga

専門分野は地質学・漂着学。地球の環境の変遷などを調べるとともに、石狩の浜辺にどんなものが漂着し、それがどんな意味を持っているかを研究している。



工藤 義衛 Tomoe Kudo

専門分野は考古学と風俗史。歴史・文化全般に造詣が深く、石狩独特の文化を研究する一環で石狩の食を代表する「石狩鍋」の歴史やルーツについても調査している。